

原著：秋田大学医短紀要10(2)：103-111, 2002

基礎看護技術の教育のあり方に関する検討
— 臨地実習における「清拭」の実施状況の分析から —

石井 範子 長谷部 真木子 佐々木 真紀子

要 旨

基礎看護技術の学内授業と臨地実習の関連性および教育方法上の課題について検討することを目的とした。

対象は本学看護学科3年生72名であった。質問紙により、臨地実習で経験した「清拭」の経験回数、方法とその理由、学内学習の活用状況と内容、および援助のポイントの実施状況について調査した。

その結果は、以下の通りである。

- 1) 「清拭」の経験回数は69.2%の学生が20回以上であった。
- 2) 患者・学生の双方にとって便利という理由で78.9%の学生が清拭車を利用していた。
- 3) 91.6%の学生が学内学習を生かし、生かしたことは方法・留意事項であった。
- 4) 80%以上の学生が、援助のポイントの25項目中19項目を毎回実行していた。
- 5) 援助のポイントに基づいて実行しない理由としては、「気づかなかった」が多く、その他に「病棟のやり方に従った」、「ものがなかった」などということが挙げられた。

学生に看護技術を確実に習得させるためには、基礎看護技術の担当教員と実習担当教員、病棟の実習指導者の密接な連携や、臨地実習前に学生に復習させる機会の設定が必要であることが課題となった。

1. はじめに

近年、新卒看護師の看護技術の未熟さが問題視され¹⁾、卒後臨床研修の必要性等も議論されている。看護技術の未熟さの要因として、平成2年のカリキュラム改訂以降の実習時間数の減少や理論重視の教育等が指摘されている²⁾。

秋田大学医療技術短期大学部（以下、本学とする）看護学科では、看護学の各分野の看護技

術教育に先立ち、1年次前期から2年次前期に基礎看護技術の授業に210時間（7単位）を費やし、そのうち約90時間の演習を行っている。さらに1年次に45時間、2年次に90時間の基礎看護実習を病院で行っている。また、成人、老年、精神、母性、小児、在宅の各看護学の臨地実習は、3年次の4月上旬から11月中旬までの期間に合計1035時間（115日）行われている。

秋田大学医療技術短期大学部
看護学科

Key Words: 基礎看護技術
教育
清拭
臨地実習

村上ら³⁾が、臨地実習でなければ学習できない内容の一つとして、知識・技術・態度の統合性を掲げているように、学内で学んだ基礎看護技術は、臨地実習において患者の状態や場の状況に応じて的確に適用することで、より確かな看護技術として習得されるものと考えられる。

今回、すべての臨地実習が終了し卒業の近い学生に対して、学内授業と臨地実習の関連性および教育方法上の課題を明らかにするために臨地実習における基礎看護技術の実施状況を調査した。ここでは臨地実習において経験する機会が多く^{4) 5)}、卒業までに実施できることが期待されている^{6) 7)}看護技術の一つである「清拭」を取り上げた。調査結果を基に、基礎看護技術の教育のあり方を検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象：本研究の主旨に同意した本学看護学科3年生72名である。
2. 方法：調査内容は、臨地実習における「清拭」の経験回数、清拭の方法とその理由、学内学習の活用状況と活用できたあるいは活用できなかった内容、25項目からなる援助のポイントに基づく実施の状況ならびに実施しなかった場合の理由とその状況である。経験回数は実数を記述させ、清拭の方法については、用具によって手順や留意事項等が異なるため、使用した用具についての回答が得られるよう「毎回、清拭車を使用した」、「毎回、洗面器を使用した」、「どちらかといえば清拭車を使用することが多かった」、「どちらかといえば洗面器を使用することが多かった」、「清拭車と洗面器を併用することが多かった」から選択させ、その理由を自由記述させた。学内学習の活用状況は「充分生かした」、「まあまあ生かした」、「あまり生かせなかった」から選択させ、活用できたあるいは活用できなかった内容は自由記述させた。援助のポイントに基づく実施の状況については、「毎回実行した」、「時々実行した」、「実

行しなかった」から選択させた。さらに実行しなかった場合はその理由を「機会がなかった」、「気がつかなかった」、「行おうとしたができなかった」、「その他」から選択させ、「行おうとしたができなかった」、「その他」の理由の内容を自由記述させた。尚、選択式回答の場合はすべて択一とし、自由記述による回答では、記述件数の指定はしなかった。調査は臨地実習終了後の12月初旬に一斉回答方式で実施した。

「清拭」とは、ここでは全身清拭または部分清拭のことをいい、足浴等の部分浴は含まないこととした。

3. 分析方法

- 1) 経験回数、使用した清拭用具、学内学習の活用状況、援助のポイントに基づく実施の状況については単純集計し、割合を求めた。
- 2) 自由記述された事項については、著者らで分類し、内容ごとの件数を求めた。

III. 結果

72名に調査票を配付し、71名から回収できた。

1. 清拭の経験回数 (図1)

臨地実習で経験した「清拭」のおおよその回数は、50回以上が14名 (19.7%)、40~49回が14名 (19.7%)、30~39回が13名 (18.4%)、20~29回が8名 (11.4%)、10~19回が5名 (7.0%)、9回以下が1名 (1.3%)、不明16名 (22.5%)であった。不明とした学生の全員が「何回も経験したが回数はわからない」と記述している。

2. 「清拭」の方法

「清拭」の方法は、「毎回、清拭車を使用した」56名 (78.9%)、「どちらかといえば清拭車を使用することが多かった」11名 (15.5%)、「清拭車と洗面器を併用することが多かった」4名 (5.6%)であった。「毎回、洗面器を使用した」、「どちらかといえば洗面器を使用することが多かった」のいずれについても回答がなかった。

「毎回、清拭車を使用した」の理由として64

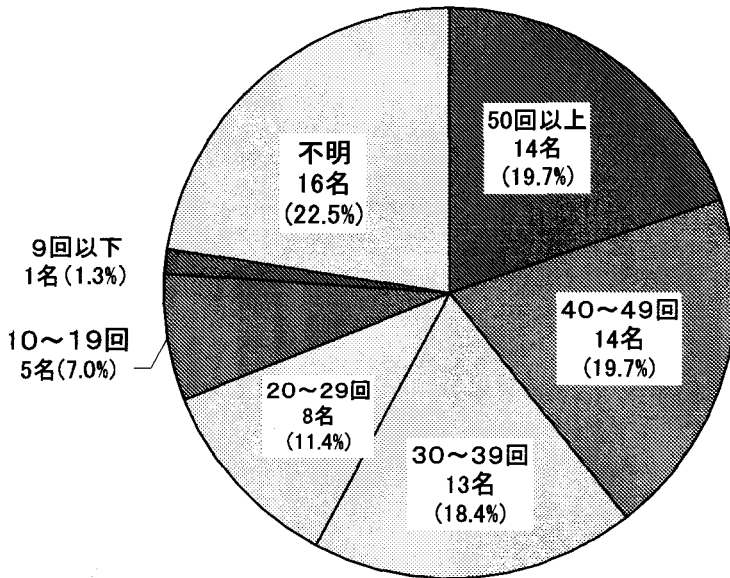


図1 清拭の経験回数

件の記述があり、①「使いやすく便利であり、効率的である」、「お湯をこぼすことがない」等の作業効率に配慮した内容が41件、②「清拭車の方が楽」等の学生の都合を述べた内容が10件、③「待たせる時間が少ない」、「清拭車内のタオルの色分けでセルフケアにも役立つ」等の患者にとってのメリットを考慮した内容が8件、④「援助を受け入れてもらいやすい」等の患者との関係に配慮した内容が2件、⑤他者の指示を表す内容が3件であった（表1）。「どちらかといえば清拭車を使用することが多かった」の理由は、①清拭車が便利7件、②洗面器と温湯を使用することは不便3件、などであった。「清拭車と洗面器を併用することが多かった」の理由は、①患者の汚れに合わせた2件、②患者の状態に合わせた1件などであった。

3. 学内学習の臨地実習における活用状況

学内で学習したことを臨地実習に「充分生かした」31名（43.7%）、「まあまあ生かした」34名（47.9%）、「あまり生かせなかった」6名（8.4%）であった。生かすことができた事項として157件の記述があり、①手順、拭く方向

や圧の強さ、ワッシクロスの使い方等の清拭の方法に関する事95件、②留意事項全般、保温、羞恥心に対する配慮等の留意事項48件、③その他14件であった（表2）。生かすことができなかった事項としての記述が41件あり、①洗面器と温湯を用いた清拭法、綿毛布やバスタオルによる身体の覆い方、等の清拭の方法に関する事項29件、②温湯の準備、室温や湿度の調節等の使用物品と準備に関する事項6件、③一通りの就床患者に対する清拭ができなかった等、経験できなかった事項4件、④その他2件であった（表3）。

4. 援助のポイントに基づく実施の状況

（表4）

「清拭」は患者の全身の皮膚に直接施し、患者の心身の安楽や安全に大きく影響するケアであることから、提示した全ての援助のポイントに基づいて実施することが原則とされる。患者の状態によっては患者自身で部分清拭することができる場合もあることを考慮し、ここでは80%以上の学生が毎回実行していることを期待した。80%以上の学生が「毎回実行」としていた援

(4) 石井範子／臨地実習中の「清拭」の分析による基礎看護技術教育の検討

表1 「毎回、清拭車を使用した」理由
64件中、()：記述件数

理 由
①作業効率に配慮：合計41件 ・使いやすく便利であり、効率的である。(18) ・いつも温かいタオルが準備されて手軽である。(14) ・タオルが加熱され清潔である。(5) ・冷えたタオルを再度保温できる。(2) ・お湯をこぼすことがない。(2)
②学生自身の都合：合計10件 ・清拭車の方が“楽”である。(9) ・洗面器に湯をいれて使う方法に気がつかなかった。(1)
③患者にとってのメリットを考慮：合計8件 ・待たせる時間が短い。(7) ・タオルが部位別に色分けされセルフケアに役立つ。(1)
④患者との関係に配慮：合計2件 ・援助を受け入れてもらいやすい。(1) ・患者に清拭車のタオルの使用を希望された。(1)
⑤他者の指示：合計3件

表2 臨地実習で学内学習を生かすことができた事項
157件中

①清拭の方法に関すること：(合計95件,60.5%) ・拭く方向(23) ・拭く圧の強さ(19) ・手順(18) ・タオルの温度の確認方法(9) ・体位の工夫(7) ・関節部の支え方(7) ・方法全般(6) ・ワックロスの使い方(3) ・陰部の拭き方(2) ・乾燥したタオルでの拭き方(1)
②留意事項に関すること：(合計48件,30.6%) ・患者の羞恥心に対する配慮(19) ・患者の保温(8) ・所要時間(5) ・身体の露出に対する配慮(5) ・患者の心身の観察の必要性(4) ・ケアに対する患者の同意(3) ・留意事項全般(3) ・施行中のコミュニケーション(1)
③その他：(合計14件,8.9%)

助のポイントは25項目中19項目であった。「毎回実行」が80%未満であった援助のポイントは6項目で、実行した学生数の少ない順に「清拭後、乾燥したタオルで湿気を除いた」10名(14.0%)、「清拭タオルには柔らかい保温性のある物を選んだ」38名(53.5%)、「汚れの度合い・部位に応じた清浄剤を選び使用した」39名(54.9%)、「腹部は腸蠕動を促進するように配慮して拭いた」43名(60.6%)、「保温のための掛け物の掛け方を工夫した」51名(71.8%)、「室温に配慮した」55名(77.5%)であった。これらには「室温調整」、「清拭タオルの選び方」のように病院のシステムにより学生が主体的に実行できないという制約を持つものも含まれている。また、全員が毎回実行が100%の「充分温かいお湯の準備」と「患者への事前の説明」および98.6%の「お湯(タオル)が冷めない工夫」以外の全ての援助のポイントにおいて、実施しなかった理由に、「気がつかなかった」ということが挙げられていた。その他に80%未満であった援助のポイント「室温に配慮した」、「保温のための掛け物の掛け方を工夫した」、「清拭後、

乾燥したタオルで湿気を除いた」、「清拭タオルには柔らかい保温性のある物を選んだ」では、「物がなかった」、「病棟の看護師のやり方に従った」、という内容の理由がみられた。とくに実施者が最も少なかった「清拭後、乾燥したタオルで湿気を除いた」においては、「病棟の看護師のやり方に従った」9件、「乾燥したタオルがなかった」2件であった。「汚れの度合い・部位に応じた清浄剤を選び使用した」では、「機会がなかった」とするほかに、「洗剤がなかった」という理由が3件あった。「腹部は腸蠕動を促進するように配慮して拭いた」では、「患者自身でできる場合が多かった」3件、「順調な排便ができる人にはしなかった」2件というように患者の状態によって実施しなかったという内容の理由が挙げられていた。

IV. 考 察

1. 経験回数について

「清拭」は、皮膚の清潔、血液循環の促進、患者の爽快感などの効果と同時に、患者と看護者のコミュニケーションが促進される看護技術

表3 臨地実習で学内学習を生かすことができなかった事項 41件中

- | |
|--|
| <p>① 清拭の方法に関すること：(合計29件, 70.7%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洗面器・温湯を使用した清拭法(17) ・綿毛布やバスタオルによる身体の覆い方(5) ・ワックロスの使い方(3) ・バスタオルによる水分の拭き取り(2) ・目的に応じた方法の選択(1) ・拭く方向(1) <p>② 使用物品と準備に関すること(合計6件, 14.6%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・室温や湿度の調節(2) ・温湯の準備(2) ・使用するタオルの枚数(1) ・清浄剤の準備(1) <p>③ 経験できなかったこと：(合計4件, 9.8%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就床患者に対する清拭の全般(2) ・ドレーン挿入中の患者の清拭(1) ・絶対安静の患者の清拭(1) <p>④ その他：(合計2件, 4.9%)</p> |
|--|

であることから、学生の臨地実習中に経験を重ねて在学中に技術を習熟させることを期待している。

卒業時の「清拭」の経験について、二つ森⁷⁾は全学生が経験し、平均回数は35回であったことを、片岡ら⁸⁾は平均回数が33.3回であったことを、それぞれ報告している。本調査では、回数不明な回答があったことから平均回数を把握することはできなかったが、57.8%の学生は30回以上の経験をしており、不明としている16名の学生全員が「何回も経験した」と述べていることから、平均回数は前二者の報告と同等の30回を越えるものと察せられる。本学の115日間の臨地実習において、「清拭」の頻度が高い分野は、受け持つ患者の特徴から成人・老年・小児看護学の病棟実習であり、それらの実習日数は合計で約60日である。2～3日に1度の割合で「清拭」を実施すると、20～40回の経験をすることはできるものと推測される。そのような中で49名(69.2%)は20回以上経験していたが、6名(8.3%)は20回未満であった。「清拭」の経験回数が一定以上になるよう学生に意識づけるために指導者からの働きかけや、受け持ち患者の選定時に「清拭」を必要とする患者を選択するような配慮が必要であると考えられる。

2. 「清拭」方法について

本学の「清拭」の学内授業では、「洗面器と温湯」による方法を中心に教授している。洗面器と温湯による方法は、準備や後始末が簡便で常時蒸しタオルが準備されている清拭車を用いた方法に比べ、準備・後始末に時間かかり、タオルが冷めないよう気配りが必要であるが、汚れに応じてタオルに含ませる湯の量を調節したり、清浄剤を含ませて清拭できること、使用するタオルが少ない等の利点もある。また、清拭車は高価であることから学生が卒業後に就業する全ての場に設置されているとは考え難い。本学の実習病院では全病棟に設置されていることから清拭車による方法で「清拭」を経験した学生が圧倒的に多かったものと考えられる。しかし、在学中に適温の温湯や適切なタオル類の準備、汚れの程度にあわせて清浄剤を使用する方法等を学習することは、清拭車を用いるだけの経験では、不十分である。したがって、作業効率の良いことや学生の都合を優先するだけではなく、患者の身体の汚れの状況も十分にアセスメントし、清拭車による方法か、洗面器と温湯による方法か、両者を併用する方法か、を選択する態度を養うことも必要であると考えられる。

3. 学内学習の活用状況と援助のポイントに基づく実施の状況

学内で学習したことを91.6%の学生は生かすことができ、8.4%の学生は生かすことができなかったとしていることから、学生は概ね学内学習を意識して実習をしていると捉えることができる。

学内学習を活用できた事項と活用できなかった事項のいずれにおいても、記述された内容は方法や留意事項に関するもので、援助のポイントとして提示している事項でもある。援助のポイントの25項目中22項目で、「気がつかなかった」ということが実行しなかった理由の一部として挙げられていることは、学生がそのポイントを実施に反映させるまでの知識として習得しないまま実習に臨んでいたものと推察される。実施の場面で想起させるような指導者の関わりが求められると同時に、学校側ではその看護技

表4 援助のポイントに基づいた実施の状況

	援助のポイント	実施状況 n=71, 単位:人,():%			実施しなかった理由とその状況	
		毎回 実行した	時々 実行した	実行しな かった	理由	状況 ():件数
安全への配慮	・患者の障害・可動範囲・病状を考慮し方法を選択した。	68 (95.8)	3 (4.2)		b 1 d 2	・全て充分にできなかった (1)
	・室温に配慮した。	55 (77.5)	11 (15.5)	4 (5.6)	a 2, b 6 c 4, d 3	・自分では調節できなかった (3) ・確認しなかった (1)
	・保温のための掛け物の掛け方を工夫した。	51 (71.8)	12 (16.9)	8 (11.3)	a 5, b 7 c 3, d 5	・自立している患者には自分でやってもらったので掛けなかった (1) ・掛け物を掛けないで一気にやってしまう方がよいと指導された (5)
	・十分に温かいお湯(清拭タオル)を準備した。	71 (100)				
	・温かいお湯(清拭タオル)が冷めないよう工夫した。(交換)	70 (98.6)		1 (1.4)	a 1,	
	・清拭タオルの端がプラプラしないよう使い方に気をつけた。	57 (80.3)	9 (12.7)	5 (7.0)	a 0, b 9 c 5, d 1	・すぐ冷めるのでタオルを手に巻けなかった (2) ・急ぐと巻けなかった (2) ・最後の実習で学んだのでそれまではできなかった (1)
	・清拭中、患者の観察をした。	67 (94.4)	4 (5.6)		b 4	
	・清拭後、直ちに乾燥したタオルで湿気を除いた。	10 (14.0)	23 (32.4)	48 (67.6)	a 9, b 38 c 2, d 8	・忘れていた (1) ・必要ないと思った (1) ・乾燥したタオルがなかった (2) ・病棟のやり方に従った (6) ・予めよく絞ったタオルを使用した (1) ・看護婦の指示で直ぐ寝衣を着せた (3)
・体動によるエネルギーの消耗が最小限になるよう気をつけた。	58 (81.7)	9 (12.7)	4 (5.6)	a 2, b 8 c 1, d 2	・患者自身ですることが多かった (1) ・行っているうちにやり方のまずさに気づいた (1) ・激しく消耗している患者でなかった (1)	

安 楽 で あ る こ と 効 果 的 で あ る こ と	・患者に清拭をする事を説明し、 了解を得てから実施した。	71 (100)					
	・使用物品を不足のないように準備 してから行った。	65 (91.5)	6 (8.5)		b 3 c 1, d 1	・学習不足のため忘れたものがあった (1)	
	・清拭タオルは柔らかく保温性の あるものを選んで使用した。	38 (53.5)	4 (5.6)	29 (40.9)	a 7, b10 c 3, d11	・清拭車に入っているタオルを使うことになっているの選択の 余地がなかった (11) ・清拭車には固いタオルしかなかった (11)	
こ と 効 果 的 で あ る こ と	・患者のプライバシーに配慮した。	70 (98.6)	1 (1.4)		b 1		
	・清拭の部位にあわせて身体を十分 に支えて行った。	68 (95.8)	3 (4.2)		b 1 d 1		
	・短時間で言うよう気をつけた。	69 (97.2)	2 (2.8)		b 2		
こ と 効 果 的 で あ る こ と	・汚れの度合いに応じた拭き方を 選択した。	65 (91.6)	5 (7.0)	1 (1.4)	b 1 c 2, d 1	・最初の頃、時間がかかり拭き方を考える余裕がなかった(1)	
	・汚れの度合い・部位に応じた清 浄剤を選び、使用した。	39 (54.9)	10 (14.0)	21 (29.6)	a15, b 8 c 2, d 4	・清浄剤がなかった (8) ・強すぎる清浄剤もどうかと思った (1)	
	・部位の特徴(構造・皮膚や粘膜等 の状態)に応じた拭き方であっ た。	61 (85.9)	6 (8.5)	2 (2.8)	a 2, b 6		
こ と 効 果 的 で あ る こ と	・四肢は末梢から中枢に向けて拭 いた。	65 (91.6)	3 (4.2)	3 (4.2)	b 4 c 1, d 1	・拭きにくいところがあり、適切にできなかった (1) ・短時間でやっせまおうとゴシゴシと拭いたことがある(19)	
	・腹部は腸蠕動を促進するように 配慮して拭いた。	43 (60.6)	15 (21.1)	13 (18.3)	a 5, b17 c 2, d 3	・腹部の清拭は患者自身できる場合が多かったので配慮しな かった (3) ・順調に排便ができていない人には実施しなかった (2)	
	・適度の圧で拭いた。	66 (93.0)	5 (7.0)		b 2 c 2	・拭いているうちに皮膚が赤くなってしまった (1) ・どの程度の圧が適当かわからなかった (1)	
こ と 効 果 的 で あ る こ と	・清拭中、コミュニケーションの 円滑化を意識して会話した。	65 (91.6)	5 (7.0)	1 (1.4)	b 4 c 1, d 1	・清拭を手早く行おうとすると無言になった (2)	
	・患者の心理面の観察をした。	58 (81.7)	11 (15.5)	2 (2.8)	a 1, b 6 c 3	・患者の心の内を捉えるような言葉を切り出すことができな かった (1)	
	・患者の身体の観察をした。	69 (97.2)	2 (2.8)		b 1		
こ と 効 果 的 で あ る こ と	・患者の爽快感が得られた。	63 (88.7)	8 (11.3)		b 2 c 3, d 2	・清拭後、やっぱりシャワーや入浴がよいと言われた (2) ・患者から爽快感を表す言葉が聞かれなかった (2)	

(注) ゴシックは「病棟のやり方に従った」という内容を、網掛けは「物がなかった」という内容を示している。

術のポイントを復習させるための働きかけが必要といえる。

「毎回実行」が80%未満であった援助のポイント「乾燥したタオルで湿気を除いた」、「掛け物の掛け方を工夫した」の2項目では、実施しなかった理由に「病棟の看護師のやり方に従った」という内容の記述が、前者で9件、後者で5件みられた。これらのポイントは、使用する清拭用具に拘わらず「洗面器と温湯」または「清拭車」のいずれの方法でも必要な事項であり、学内授業で強調したポイントでもある。学内で学んだ看護技術を、患者やその場の状況に応じていかに適用するかを学生自身が十分に検討しないまま模倣しているといわざるを得ない。一方、実施場面で学生の指導者である病棟看護師は、モデルとして看護技術を実施する立場にある。つまり、看護基礎教育段階の学生の前では、学内で教授している方法を踏まえて実施して見せたり、状況によって援助のポイントを応用し、単に省略しているのではないことを学生に理解させるように説明することも必要といえる。

4. 基礎看護技術の教育について

本学の基礎看護技術の授業は、1年次前期から2年次前期までの1年半で行われている。「清拭」のような日常生活に関する看護技術の授業は1年次で終了するため、3年次の臨地実習開始までは1年の期間がある。授業で学んだことを記憶し、実施に活用するには長い期間である。臨地実習開始前に、基礎看護技術を復習させる機会を設定することも必要である。

看護技術の習得などの臨地実習における学生の学びを効果的にするためには、適切な指導が求められる。臨地実習指導は、「学内授業の内容や学生を知っている学校の教員と患者を知っている臨床側の指導者が連携を図りながら行うことが不可欠である」⁹⁾とされているように、本学の3年次の臨地実習指導は、基礎看護学を担当していない教員と、病棟で位置づけられている実習指導担当者が、それぞれの役割を持って担当している。さらに、学生の学内授業で学んだ看護技術と臨地実習で学ぶ看護技術が乖離しないように、基礎看護技

術(学内授業)の担当教員・臨地実習担当の教員・病棟側の実習指導担当者の三者の連携も必要であると考ええる。

V. 結 論

臨地実習における「清拭」の実施状況についての調査から、基礎看護技術教育のあり方について以下の結論を得た。

1. 学生が看護技術を経験できるような受持患者の選択や、学生に経験を促すことが必要である。
2. 看護技術を実施する前に、患者の状況をアセスメントさせ、学生が行おうとしている方法を確認するような指導者の関わりが必要である。
3. モデルとなりうる指導者の看護技術の実施などにより、援助のポイントを想起させるように指導することが必要である。
4. 臨地実習前に、学内で看護技術を復習させる機会の設定が必要である。

VI. おわりに

新卒看護師の看護技術の未熟さが問われる中で、看護技術の習得を卒後に期待するだけでなく、看護基礎教育課程で確実に身につけさせておくべき看護技術もあると考える。今回は、臨地実習における「清拭」の実施状況についての調査から、基礎看護技術の教育のあり方を検討した。調査は8ヶ月に及ぶ実習の状況を振り返って回答させたものであり、回答内容に緻密さが無いことが否めない。今後、臨地実習中の調査を加えるなど、具体的な内容の回答が得られるように調査の方法を検討することが課題である。

文 献

- 1) 正木治恵, 山内豊明, 勝野とわ子他(2000) 4年制大学における看護技術教育のあり方. 看護教育41(9):734-741.
- 2) 井部俊子(2001) 看護婦の卒後研修はなぜ必要か. 看護展望26(5):17-23.
- 3) 村上生美, 原萃子, 加国正子他(1993) 各

- 短期大学部における臨地実習目的の実態と実習固有の学習. 看護教育34(13):1072-1075.
- 4) 吉永久恵, 阿曾洋子, 中村恵子(1987)卒業時における看護技術の習得状況からみた技術教育の検討. 第18回日本看護学会看護教育分科会集録:183-186.
- 5) 奥宮暁子, 桑野タイ子, 小野沢康子(1988)基礎技術の到達度と実習体験の可能性(第1報)－基礎看護技術－. 第19回日本看護学会看護教育分科会集録:28-30.
- 6) 吉田時子, 吉武香代子(1975)看護の基礎教育終了時における看護技術の到達度に関する研究. ナースステーション5(4):68-78.
- 7) 二つ森栄子(1998)臨床側とともに考える看護技術到達度. 看護教育34(9):661-668.
- 8) 片岡万里, 浜田弘子, 野村幸子(1987)学内技術教育への一考察－病院実習経験のアンケート調査から－. 第18回日本看護学会看護教育分科会集録:187-189.
- 9) 石井範子(1995)望ましい臨地実習指導者とは. Quality Nursing 1(6):6-10.

A Study of Basic Nursing Skills Education
－ Analysis of administration of “Bed Bath” in nursing care practice －

Noriko ISHII Makiko HASEBE Makiko SASAKI

Department of Nursing, College of Allied Medical Science, Akita University

The purpose of this study is to investigate the relevance of classes and nursing care practice, and problems surrounding education methods in the basic nursing skills course.

The subjects were 72 third-year nursing college students .

Nursing skills experienced during nursing care practice were investigated by the questionnaire. The contents of the Investigation were frequency of application of Bed baths, method and reason, utilization and content of skills learned in class, and putting the point of the lesson into practice.

It was found:

- 1) 69.2% of students have administered Bed Baths over 20 times.
- 2) 78.9% of students used the Bed Bath Car every time for reason of convenience for both patients and nurses.
- 3) 91.6% of students utilized their class training. Contents utilised were methods and considerations.
- 4) Over 80% of students out 19 out of 25 items of the point of the lesson into practice each time.
- 5) Reason for not applying these items every time were that their omission had not been noticed, or that students had to follow established ward methods.

It is necessary that the faculties of basic nursing skills and the faculties of nursing care practice and the instructors in wards cosely cooperate, and it is important that chances are created for students to put theoretical learning into practice.